

京都産業大学と若泉敬の時代（Ⅲ）：戦後日本と人間性の恢復

岩武, 光宏
拓殖大学：専任職員

<https://doi.org/10.15017/7340407>

出版情報：総合文化学論輯. 21, pp.1-18, 2024-11-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン：

権利関係：Copyright (C) 総合文化学研究所 all rights reserved. この論輯の全ての文章・画像の権利は、総合文化学研究所に属します。無断での使用・転載を禁止いたします。



京都産業大学と若泉敬の時代（Ⅲ）

— 戦後日本と人間性の恢復 —

岩武 光宏

はじめに

本稿の目的は、近代日本の「大学史」において特異な発展過程を辿った京都産業大学と教育者・若泉敬の事績について考察することである。同大学の発展過程とは、短期間での驚異的な発展¹はもとより、異色の人脈が交錯した同志の共同体が核となった思想形成を意味する。草創期における同志の共同体は創設者荒木俊馬、盟友の岩畔豪雄、そして若泉が中心となり強烈な磁場を形成していった。

ありていにいえば、戦時下の思想的伏流水が戦後日本に湧出し奔流となったものが京都産業大学の建学に結実したのである。すなわち戦前に芽生えた思想が敗戦を機に一旦は潰えたかのように見えたものの、地下水脈のように流れ続けていたことの証左でもある。

具体的にいえば、拙稿（Ⅰ）でも指摘した「岩畔が戦前に手掛けた陸軍中野学校や登戸研究所、あるいは対米非戦に向けた日米交渉の経験、総力戦推進派の人脈」であり、それは岸信介や星野直樹、椎名悦三郎、水野成夫、石田礼助、福田赳夫、西浦進、荒井溪吉といったかつての総力戦体制の推進者人脈を意味している。その面々の一部はまぎれもなく満洲人脈とも重なっている。ゆえに拙稿（Ⅱ）では、溝部〔2017〕の論考をふまえて、京都産業大学の範型の一つに満洲建国大学²が想起されることを論じた。

宮沢〔2006〕の講演記録³によれば、「建大は、研究・教育などあらゆる面から民族協和の実践に務める大学であるといわれましたが、日本の敗戦に伴う満洲国の崩壊によって、一九四五年八月二三日に解散式を行って閉学し、現在この大学を継承する教育機関は国内外に存在していません」（p.5）と述べており、建国大学の理想は未完のまま閉学となったことは明白な史実である。教育機関として「民族協和」の理想は野心的な試みであったが、そもそも同床異夢であったとする否定的な見解があり、他方では一定の成果を生んでいたという評価もある⁴。その議論が本稿の目的ではない。あくまで目的は冒頭に述べたとおりである。しかしながら「満洲国の理想」それ自体の評価は別にして、大戦の省察を経て戦後日本に活かすあらたな理想を打ち立てるダイナミズムは、非連続的に戦前・戦中期に芽生えた思想を引き継いだことから生じている。その果実というべき教育機関こそ京都産業大学ではないだろうか。そこには上海の東亜同文書院大学⁵を戦後継承した愛知大学のような連続性はない。とはいっても、戦前と戦後を繋ぐ思想史的展開において議論の余

地はあると考える。すなわち荒木の大学創設において重要な相談役であった作田荘一

（元、満洲建国大学副総長）をはじめ建国大学での教員経験を経て京都産業大学教授となった江頭恒治、石田興平、西元宗助、黒松巖⁶は、わずか7年余で潰えた「道義国家の建設」の夢を戦後日本での高度経済成長期に再び「理想の大学」の建学に向かう秘めたるモチベーションを発揚させたことにほかならない。その知的営為の結晶こそ、京都産業大学の「建学の精神」である。

したがって、拙稿（Ⅱ）で論じた「学校法人京都産業大学設立趣意書」は満洲建国大学をモデルとして新日本建設に向けてのハイブリッド化した理念を紡ぎ出したといえなくもない。それは京都産業大学の人的系譜や「寮教育」の重視はもとより、実現はしなかったものの、初期における教育制度改革⁷は「教養教育」に対する真摯かつ先駆的な議論であったことを見てもあきらかである。このような同大学の特長は、かつての建国大学での徹底した「教養主義」と通底していると考える。しかし本稿では、満洲国建国の経緯および特殊性を議論するのではなく、あくまで教育機関としての大学に限定して考察の対象とする。これについては次稿（Ⅳ）で掘り下げて論じる。

さらにいえば、拙稿（Ⅱ）で述べたとおり京都産業大学の創設それ自体が戦後新制大学のあり方に一矢を放った鋭い示唆と問題提起を含むものであった。とりもなおさず、拙稿（Ⅰ）、（Ⅱ）に引き続き、先行研究に倣いながらも、あくまで筆者独自のフィールドワークを基調として、若泉の多方面にわたる事績から紡ぎ出された教育思想と実践を整理する。

ともあれ筆者の動機とは、「後期戦中派」といわれた若泉の生き方〈生き方のかたち〉にこそ、現代社会の諸問題を照らし出す精緻な眼差しを感じるからである。いいかえれば、その営為とは複雑かつ多様化が著しい現下の高等教育の現場における「理想の大学」を求める道標に資すべき今日的意義の抽出にほかならない。

郷土の教育と精神性

若泉の思想形成の背景には、郷土福井における学統と系譜があったことに論を俟たない。越前・若狭の精神的土壌、思想形成と実践については外伝的な別稿（2025年発刊予定）⁸で論じており、詳しくは同書での拙稿に譲る。しかしながら本稿での論理展開のうえで内容の一部は、やむをえず重複することを断っておく。

若泉が郷土出身の橋本左内、梅田雲浜、佐久間勉らの先哲から受けた影響は大きく、幼少期から青年期にかけての人格形成における端緒となったことは想像に難くない。

源流には山崎闇斎、吉田東篁、浅見綱斎の思想継承と生成があったといえよう。いわゆる「崎門学派」であり、幅広く多くの学統に継承されていたことは明瞭であるが、共通している特徴は中華思想、易姓革命を排除した日本版の朱子学であり、尊皇思想にして実学主義であったと考える。左内の師であった吉田東篁は社会実用の学を一貫して唱えてお

り、熊本実学派の横井小楠が招聘されたことで、さらに福井藩の実学が生成されたのである。すなわち藩校明道館では、崎門学派と実学派の融合による「体認の学」が結実する。

これらの精神的土壌を背景とした若泉の立志の原点には、十五歳の福井師範学校在学時に体験した福井空襲の衝撃と価値観の転換が土台となっていた。後年の英米両国はじめ世界雄飛への大きなモチベーションとなったことにほかならない。

後藤〔2010〕が指摘するように、とりわけ左内が十五歳で著した『啓発録』の影響は大きい。同書には「去稚心」、「振気」、「立志」、「勉学」、「択交友」の五訓に則り著されている。これは左内が四書五経などをはじめ漢籍の影響を受けていることも明瞭であるが、角鹿〔2023〕は、「崎門学では、儒学の易姓革命を否定し、君主に対する絶対的な臣下の忠義を説くのである。空理空論を嫌い現実における実践を重視するのである。こうした視点からの見識は看過できない。このことから『啓発録』の成立において、単純で安易な漢籍からの出典論や軽率で憶測にしか過ぎない影響論についての言及は慎むべきであろう」

（pp.59-60）と論じているように、左内の精神性の高さは様々な影響を基盤として構築された純粋な所懐であると考えるべきであろう。

若泉が同郷の教え子である吉村（京都産業大学5期生）に、おりにふれては左内の「生きざま」を語っていたことは、若泉の思想形成を考察するうえで、不可欠な視点である。そして若泉は吉村の長男信哉の誕生日に『少年、君たちはどう生きるか 橋本左内先生の「啓発録」に学ぶ』を贈っていることから若泉の矜持の深層には、常に『啓発録』が息づいていたことを如実に描写している。

往年の若泉が京都産業大学の学生に問いかけ訴え続けていた「我が人生いかに生きべきか」というテーゼの原点でもあった。まさに若泉の事績を辿れば、その要所において身の処し方に左内の思想をなぞるかのような場面が感知される。

他方、現在でも福井県の教育現場にその気風は色濃く残り、左内が教育改革を行った藩校明道館の流れをくむ福井県立藤島高等学校の同窓会（明新会）は学習漫画「幕末・維新人物伝 橋本左内」を発刊し、その功績を後世に伝えるため県内の小中学校へ寄贈している⁹。また、前掲〔2023〕によれば、福井市の中学校では二年生（満十四歳）を対象に

「立志式」が行われているという。〈自分の進路や人生に対して目標を立て、それを成し遂げるための決意をするというもので、『啓発録』の五訓（去稚心・振気・立志・勉学・択交友）にならい、各自が「わたしの啓発録」等を作文したり発表したりして、自分と向き合う機会を作っている。福井県は児童・生徒の学力が総合全国上位クラスに位置しており、その背景の一つとして、風土が育んだ勤勉さ・忍耐力や、左内に学んだ学校行事である立志式の効果もあろう〉（pp.264-265）と述べているように、今なお福井県内には左内の教育思想が活きているといえよう。左内の思想は、国事に奔走した志士たちへと広範に引き継がれたことを考えても同様の精神性を若泉が継承したことは想像に難くない。

さらに、佐久間勉の事績は若泉の死生観に大きな影響を与えている。福井県若狭出身の

佐久間勉艇長（海軍大尉）の第六潜水艇殉難と艇長の行動は当時の社会に衝撃と感動を生んでいる。1910（明治43）年4月15日、第六潜水艇は山口県新湊沖で半潜航訓練中に沈没。佐久間艇長以下14名が殉職した。2日後に引き上げられた潜水艇から艇長の遺書が発見され、国内外に大きな反響を呼んだ。手帳に記した遺書には、沈没の謝罪から事故の分析まで詳細に記し、あわせて部下たち家族の行く末を案じる思いが綴られていた。艇長と心を一にする乗組員は絶命まで持ち場を離れることがなかったという。この「沈着勇断」な艇長および乗組員の行動は、「身を殺して仁を成す」、「生死一如」という若泉が生涯にわたり抱いていた信条と自身の「生きざま」に繋がっている。

福井県の特長は先人の事績を次世代へ伝えていくことにに関して特段に注力していることに顕著である。現在、日本の各地域で同様な傾向が散見されているものの、福井県の場合、かなりその傾向は色濃いものであろう。したがって先人の評伝などの書物が多いことは当然であるにしても、とりわけ年少者に向けたものが多いことは瞠目に値する。

佐久間艇長伝記編集委員会〔2012〕の「編集後記（編集あとがきにかえて）」には、「明治四十三年四月十五日、第六潜水艇が山口県新湊沖において半潜航訓練中に、不測の事故により遭難してから百年余の歳月が過ぎました。その間、佐久間勉艇長と第六潜水艇遭難に関する書物が数多く出版され続けてきました。しかし、その多くは一般成人を対象とした書籍が大部分で、小・中学生を対象とした書物はあまり出版されていません。そこで、私どもは、佐久間艇長の出身地である若狭町において、小・中学校児童・生徒にも親しみやすい書物をとの願いから執筆・編集にとりかかりました。（中略）この書物が、小・中学校のみなさんに学校で、また家庭で読んでいただき、更にお父さん、お母さんなどとともに『はたらくこと』『職務』『職分』『生きること』などについて話し合う一助になれば幸いと思っています」と述べているように、実に年少者に配慮しつつも、精神性の伝承を意識していることが窺える。

管見の限りではあるが、これらの教育風土の発露を福井県出身者に陰に陽に感じるところがある。くわえてそれを裏付けるような施策も散見される。たとえば同県では、知事が定めた「教育に関する大綱」を基に、2020（令和2）年3月に「第3期福井県教育振興基本計画（令和2～6年度）」¹⁰を策定している。同計画では、「方針6」として「ふるさとを愛する心と社会に貢献する志の育成」を掲げている。

「ふるさと福井への誇りと愛着を育成するためには、郷土の先人や歴史、自然、伝統・文化、産業等を学ぶとともに、地域の自然や人、文化等と関わる活動を通して、地域の魅力に気づき、理解を深めていくことが重要」としており、具体的な施策には、中学校において道徳や社会、高校においてホームルームや総合的な探究の時間等で『ふるさと福井の先人100人』¹¹を活用し（同書には若泉の人物紹介が収録されている）、郷土の偉人の生き方を学ぶことを謳っており、高校では「進路の指針とする授業を推進」することを明記している。

さらに若泉の思想形成において見落としてはならないことは、常に「世界の中の日本」を念頭に置いたグローバルな視点である。これについても潜在的に左内から相応の影響があったのではないだろうか。左内は江戸末期にして今日の国際連合に相当する国際的同盟機関の成立を予言していたという¹²。当時の状況を考えれば、驚くべき卓越した世界認識を持っていたことが明瞭である。

政治と教育

福井師範学校本科を卒業（1949年3月）した若泉は明治大学政治経済学部に入學するも（1950年12月に退學）、さらなる向學心は止まることを知らず、東京大学法学部への入學（明大在籍で1950年4月）を果たした。そして寮生活（東大YMCA寮）を選んだ。これはキリスト教への関心に基づいたものであり、欧米世界を深く知るうえでキリスト教世界の重要性を認識した所以であった。また、東京大学では学生研究会土曜会に参加し、矢崎新二、岩崎寛弥、佐々淳行、新居光、粕谷一希、池田富士夫などの多くの知遇をえている。土曜会は左翼全盛の時代背景において「体制内改革」に挑んだ保守派の学生グループである。まさに、しのぎを削る環境にあつて芦田均、大山岩雄の応援、さらに内閣総理大臣官房調査室の支援も受けながら研鑽を積んでいる。その目的は敗戦国日本における真の独立、「自主体制」の確立であることにほかならない。実に多士済々な面々と肝胆相照らす仲となった若泉はその友情を終生大切にしようである。

たとえば、初代内閣官房内閣安全保障室長を務めた佐々淳行や「中央公論」の名編集長で鳴らした粕谷一希との同志的な絆は、若泉没後にも教え子の吉村に受け継がれるほど強靱な関係性を秘めていた。

ちなみに、粕谷より吉村宛の書簡¹³によれば、そこには若泉を通じて当時の京都産業大学の個性ある学風および創設者荒木俊馬の教育思想を認識していたことが窺われる。くわえて同大学の将来を案じて吉村への激励を込めた修辭が記されている。この書簡には、土曜会の結束力を垣間見るのみならず、若泉が教育者として後進の育成と大学の発展に心を砕いていたことが粕谷の筆致からも読み取れる。

根津〔2008〕によれば「戦後総合雑誌の編集者の中で、粕谷一希ほど保守的知識人の結節点にある人物を見出すことは難しい」（p.61）と論じているように、若泉の論壇での活躍もまた粕谷との土曜会以来の同志的な切磋琢磨による業績のひとつといえよう。

さらに若泉の活動は、地元の同憂の士である熊谷太三郎との繋がりも大きな援軍となった。1969（昭和44）年6月19日には、熊谷を代表とする「日本の民主主義を育てる会」が若泉の進言により発足した。熊谷は企業経営者であり、祖国愛、郷土愛を発揚し、福井市長として空襲と震災の復旧・復興に尽力した。非常時において熊谷は市長としての報酬を市へ寄付していたという¹⁴。もちろん市民からの信望は特段に厚かった。また、参議院議員、福井工業大学の初代学長を歴任し、福田赳夫内閣では科学技術庁長官を務めた人物

である。他方、アララギ派の歌人という一面もあった。

そもそも若泉自身も政界進出に意欲を示していたことで、福井県の次代を担う政治家に「二人の泉あり」と謳われた。それはほかならぬ若泉と平泉渉を意味していたが、若泉の政界進出断念により、結果的に政治家としての平泉（参議院議員、衆議院議員、科学技術庁長官、経済企画庁長官を歴任）が誕生した。

〔写真 1〕



京都産業大学追分寮で熱く語る

「京都産業大学生としての自覚－大学生活を有意義に過ごすために－我が人生、
いかに生きべきか」〈男子寮：250 人収容〉

それを断念した背景には、いくつかの理由が考えられるが、何よりも京都産業大学の教授に就任したことで、その政治行動の方法論が大きく変容したことが挙げられよう。すなわち、開学して間もない若々しい大学にフレッシュな学風が形成される過程に身を投じた若泉の胸中に去来したものと、は、「次代を担う若者」との対話であり、純粋な意気と感激であった。いわゆるヤルタ・ポツダム体制下における戦後日本の脆弱な精神文化の中で、若泉が一縷の望みを賭けたものは青年への教育であった。そこに内在した精神性とは、開学したばかりの大学の活気と若々しい学生と向き合うことで発動された教育者としての精気と熱情にほかならない。それは同大学の独特の「建学の精神」と共振、感応して同志的

結合体の構築、さらに学風生成へと大きく展開していった。前掲の満洲建国大学が全寮制であったことに倣うかのように京都産業大学では寮教育に注力している。すなわち若泉は〔写真1〕のように、「人づくり」を標榜した同大学での学生教育に邁進した。

これを裏付ける資料として、開学10年余を経た時点での『京都産業大学報』（通第61号、1976年10月25日）の回想文を以下に挙げる。

荒木俊馬総長によれば、「第一期入学生の中には、本学の建学精神に共鳴した父兄が本学に教育を託した子弟も少なくなかったが、それは兎も角、最初の頃の入学生は、言ってみれば、全く玉石混合の状態であった（玉と言っても磨かざる原鉱で矢張り石であった）。けれどもそれらの入学生の入学後はどうなったか、と言うと、本学の建学精神と教育方針を素直に受け容れた学生の中から非常に卓越した卒業生が多数に出たという事実である」と述べているが、これは当事者による自画自賛ではない。なぜなら拙稿〔2020〕で考察したとおり、客観的データ¹⁵によれば、同大学卒業生の実績は出色であるからだ。その結果は明瞭であり、とりわけ産業界での実績は顕著といえよう。

また新しい大学に雲集した各々の教員も情熱と活力に溢れていた。新進気鋭の知性は学内外で広く活躍の場を求めた。たとえば、既述の「日本の民主主義を育てる会」とは、えせ民主主義を排除し、真の民主主義を育てる運動であった。

主要メンバーは、熊谷太三郎、若泉敬、林健太郎、飯島清、城地善蔵、今日出海、村松剛、桶谷繁雄、小谷秀二郎、入江通雅、三好修、丹羽春喜、三木新、花井等、漆山成美で構成され（このうち、若泉、今、村松、桶谷、小谷、入江、三好、丹羽、三木、花井、漆山の11名は京都産業大学教授であった）、機関誌『民主主義』、『日刊福井』への寄稿や勉強会の講師も務めていた。このことから若泉をはじめとする同大学教授が戦後日本の国民世論をリードしつつ、かつ地域社会のオピニオンリーダーとして幅広く活躍していたことが窺える。

『民主主義』の第一号（1969年8月25日発行）には、若泉の論考「許せぬ学生の暴力」と並んで熊谷の「創刊の言葉」が掲載されている。この年の1月には、東大紛争（安田講堂事件）で大学が警察官千人を導入し、占拠学生を排除、学生631人が逮捕された。一方では多数の警察官が重軽傷を負った。同年11月には警視庁が大菩薩峠で武闘合宿訓練中の赤軍派53人を逮捕。同月に佐藤首相訪米阻止の三派系学生による品川・蒲田付近の火炎びん闘争で2093人が逮捕された。まさに国民が民主主義の危機を感じざるをえない時世¹⁶であった。若泉と熊谷の危機意識による同志結集の行動力は戦後の民主主義の定着に大きく寄与したものと考えられる。

トインビーとの邂逅

若泉は実学の使徒であると同時に日本文化の伝道師でもあった。前述のように若泉が十五歳の時の戦時体験は「世界の中の日本」を強く意識し、将来の日本の進路に自らの情熱

を燃やすことを決意した転換点でもあった。その思いを着実に実行に移し、欧米世界での人脈構築は若泉の真骨頂であった。高度な言語運用能力にくわえて信念に基づいた比類なき交渉力は、後年の沖縄返還交渉でも遺憾なく発揮されることとなる。愛国心に基づいた国際的教養は各国の要人をも魅了するに十分な人間力だったといえよう。

世界を舞台にした行動力は国益の面においても巨大な業績を残したが、それに隠れがちであった教育面における事績においても特筆されるものがあつた。とりわけ創設間もない京都産業大学への総合的な貢献は刮目すべき事績である。むろんこのことは同大学に止まらない。実に当時の多くの青年を啓蒙しており知的探求心の起動に少なからぬ影響を与えたのである。具体的に挙げれば、若泉は荒木総長に提言し、林語堂、アーノルド・トインビー¹⁷、ハーマン・カーン、レイモン・アロン、ゲオルギ・アルバトフらの「世界の碩学」と評される著名人の招聘を実現に導き、かつ全力を尽くした。1967年11月16日に京都産業大学体育館において世界的な文明史家であるトインビー博士の講演が開催された。博士が学生に熱く語った講演の演題は「未来の世界像と文化」であつた。

〔写真2〕



京都産業大学体育館でのトインビー博士の講演

さらに、1970年6月10日から16日にかけてロンドンのアーノルド・トインビー教授宅で若泉との対談が行われた。

アーノルド・J・トインビー、若泉 [1971] の「日本版への序文」によれば、「この『対話』は、若泉敬教授が思い立ち、非常な努力を払った結果実現したものである。彼は、準備の過程で日本の主として若い世代の人たちと討議を重ねて問題を整理した。したがって、ここに取り上げた問題は、単に私たち二人だけの私的な関心事ではないと思う。この『対話』は、過去から現在に至る人間の問題について、生涯、好奇心を燃やし続けてきた一人のイギリス人が、日本の若い世代のもつ問題を取り上げた一人の日本人に答えようとした試みである」と述べており、この「対話」は当時の画期的な企画として、1970年8月24日から12月20日まで97回にわたって『毎日新聞』紙上に長期連載されている。その内容は今なお読者を魅了し、たやすく色褪せるものではない。その連載記事を再録したものが、前掲 [1971] であるが、その「あとがき」には、毎日新聞外信部長の関口泰による

マスコミ人としての矜持と使命感が述べられている。「一般ニュース報道と解説を掲載するのが新聞だ」という常識を毎日新聞が破り、こうしたある一人の思想家の人生論、思想論をなぜ連載したのか、ということである。こういう『堅いもの』は、雑誌、単行本にまかせるべきではないか」という疑問が多く読者から寄せられたという。これに対して関口は「新聞が、広い視野から現代の基本的問題つまり何を目的に生きるか—に回答を与えようと努力するのは当然だ」と答えている。このような対談の実現には両者の信頼関係と情熱はもとより、往時の大学関係者、マスコミ人の気骨ある行動力と胆力による結晶であったといえよう。まさに『未来を生きる』という題名が示すように今日にも「対話」のエートスは生き続けている。

この影響は1968年に結成された「トインビー・市民の会」にも顕著である。1997年3月に解散するまで講演会・公開講座、ゼミナール、支部活動、刊行物等の幅広い活動が展開された。とりわけ『現代とトインビー』は93号をもって終刊となったものの、現代社会における精神風土刷新の一翼を担い続けてきたことは注目に値する。なお92号には、秀村欣二による「追悼 若泉敬先生」が掲載され、「トインビーを日本人に結びつけることに最も大きな寄与をされた」若泉への哀惜の念を述べている。

前掲[2010]でも指摘があるように、四十歳以上の年齢差があったトインビーと若泉の「対話」は「実際には対話というよりも、若泉の質問に対しトインビーが懇切丁寧に答えるという一問一答も形となっている」(p.138) ことにあきらかであるが、その多岐にわたるテーマは若泉による事前の準備（日本での青年たちとの討議内容を集約）がトインビーの示唆に富んだ学識や人間的魅力を遺憾なく引き出している。ゆえに今なお読者を魅了する所以となっている。むろん「対話」には若泉自身の専門分野のひとつでもある安全保障に係る内容にも言及している。核兵器の出現において、もはや「戦争に勝者はない」ことを「対話」で示唆している。前掲[1971]では、若泉が「核兵器の相互抑止体制の出現によって、かりに大戦争の勃発は防ぎうるとしても、局地紛争やゲリラ戦争は、依然続くだろうと思われます。戦争をなくし、永続する真の平和をもたらしたいという人類の普遍的な願望を実現するためには、どのような基本原理、条件、方策が必要だとお考えですか（後略）」(pp.276-277) という質問に対してトインビーは、「永続する真の平和に必要な条件は何でしょうか。現在のところ、私たちがもっているのは、恐怖の均衡、抑止力の均衡であり、こうした平和維持の方法が、非常に脆弱、かつ不安定であることが指摘されています。事実、こんな平和は永続するわけにはいきません。それでは、どうすれば、真の、したがって、永続する平和に到達できるでしょうか。私は、世界的な精神革命なしに、この目標に到達できるとは思いません。(後略)」(p.277) と答えており、宗教革命が欠くべからざるものとしたうえで、個人と共同体の双方における「自己中心性の克服」が平和へと鍵となることを説いている。これに対して若泉も「私は、完全な世界の調和を実現するために、人間の精神的復活の必要性について述べたあなたの見解に賛成です」

(p.278)と述べて、超国家的な制度、すなわち世界政府の樹立を理想としつつも、精神的
支持が必要不可欠であるとするトインビーの賛意を引き出している点は見落とせない。

これについては若泉にとって盟友（というよりも師弟関係に近い先輩というべきか）の
岩畔豪雄（戦前に陸軍中野学校の創設、インド独立を支援、陸軍少将、戦後は京都産業大
学の創設に参画）がトインビーとの往復書簡で触れた「世界連邦」の必然性を想起させる
のみならず、実際に符合している。1967年12月12日に国立京都国際会館で岩畔はトイ
ンビーと対談している。岩畔[1970]には、対談内容が収録されており、それによれば、
「世界連邦の可能性」について言及している。そこでは両者が共感、同意したうえでの議
論となっている。

また、岩畔[1967]の文末付近で述べていることは、ある種の結論を意味しているのでは
ないだろうか。「第三次世界大戦が内包する意義は“世界統一の達成、であり、この戦争
の結果生まれるものは世界連邦或は世界国家である。世界統一は人類に平和をもたらし、
無用な犠牲を避けて人類の繁栄を約束するものと考えられており、第一次世界大戦、第二
次世界大戦と世界的な戦争を経験するにしたがって逐次意識の度が強まりつつある人類の
夢である」(p.669)と論じたうえで、「第一次世界大戦後出現した国際連盟、第二次世界大
戦後結成せられた国際連合も叙上のような人類の夢を実現しようとした試みに外ならなか
った。しかしこの二つの試みから人類が汲み取った結論は、“実権と実力とをもたない寄
合世帯的国际機関は無力である、と悟ったことである」(同頁)と、自らの軍中枢での経
験に裏打ちされた実に核心を突く指摘をしている。

さらに、「第三次世界大戦は“実力による世界国家又は世界連邦の建設、の可能性を内
包するものであって、この点第一次及び第二次世界大戦とは自ら意義を異にしており、こ
れに類似した歴史的事実を求めれば、東洋に於ては秦帝国、西洋に於てはローマ帝国であ
ろう。しかし第三次世界大戦後に来るべき世界国家は地球全表面を領域として数十億人の
人口を内包するものであるから、その規模が地上最大のものであることは言うまでもな
い」(同頁)と論じており、岩畔による戦後二十年に及ぶ大戦の省察の一端が窺われる。

川合[2019]によれば、岩畔の省察の成果とされる二冊の著書（[1967]『戦争史論』、
[1970]『科学時代から人間の時代へ』）について、前掲[1970]の方が岩畔の戦争概念がよ
り明確となっていることを指摘している。川合の試論では、クラウゼヴィッツ、ルーデン
ドルフ、石原完爾という三人の先行者と岩畔の近代戦争概念の対比を行っているが、岩畔
のそれは全面核戦争を念頭に置いており、川合が名付けた「岩畔の虚無戦争概念」は、ト
インビーと若泉の「対話」でのテーマのひとつである「世界国家への道」〈戦争に勝者は
ない〉とも暗合している。トインビーの「自己中心性の克服」、岩畔の「人間性の回復」、
若泉の「人間の精神的復活」は、いずれも世界平和を希求するうえで、同義であると考え
る。この三者の思想は京都産業大学が「産業」を「むすびわざ」と読み解き、「むすん
で、うみだす。」とアップデートされた「教学の理念」にも、その背骨に血肉と化して生

成していることが感知される。

若泉は前掲 [1971] の「むすび」において「私たちは、まず道義を再建し、精神を復活させ、人間の持つ愛と理解を呼びさますなかに変革を求めなければならないと思います。それらを通じて、私たちは衝動的な破壊に走るのではなく、人間の愛と理性に対する深い信頼感をもとにして、心強い可能性を見いださなければならないのです。すなわち、その可能性とは、人間が、技術の進歩をコントロールでき、平和に満ちた世界に前進し、教育を通じて人間を取り巻く状況と、その運命についての新しい認識を見いだすということです。そして、この可能性を切り拓くために、教授が冒頭から繰り返し強調されたごとく、愛すること、英知をもって理解すること、そして、創造力を働かせることが不可欠の条件であると、確信します」(p.346) と述べており、自身の教育思想を表明したうえでトインビーとの対話によって紡ぎ出されたビジョンを世界の青年に向けて力強く発信したのであった。

戦後日本の失ったもの

若泉の思想形成の原点は郷土福井にあったことは既述のとおりであるが、その実践は国際政治の舞台での活動であり、その真髄は沖縄返還交渉である。ゆえに若泉の事績といえは、「沖縄返還」という日本外交史上の金字塔にばかりに目が向けられてきた傾向がある。これはむしろ、戦後日本の悲願であったことを考えれば、当然のことであろう。しかし一般的には、陰に隠れていたかのような教育者としての若泉の事績には凄まじいものがあった。戦後日本が失ったものは「領土」だけではなかった。それを取り戻すことが若泉の信念になった。その舞台は日本の戦後史における若者エネルギーの高揚をともなった高度経済成長期の最中に創設された大学での教育にあった。すなわち、もうひとつの舞台は京都産業大学であったことにほかならない。

当初、多忙をきわめていた若泉は年に数回の特別授業を担当したが、回数は多くなくとも学生に与えたインパクトは巨大なものであった。いわばリアルな国際政治のダイナミズムの注入であった。まっさらな学生にとっては刺激的で知的興奮に満ちた授業であった。旧態依然とした古い教科書に則った紋切り型の授業ではない。学生との対話、討論も行う独特のスタイルであった。「考えられないことを考え抜く、勇気と実行」、「自主独立の精神をもって、我が人生いかに生きべきか」と声を大にして学生に呼びかけた。当時の学生たちは水面下で若泉が国家的使命に奔走し、冷徹な国際政治の第一線で奮闘していたことなど、まったく知る由もなかった。しかし若泉の言葉には気魄と説得力があり、知性的な魅力と人間性に自然と引き込まれていったのであった。そのことは半世紀余を経た今なお卒業生、現役学生の心象風景と、それぞれの「生きざま」に活きている。

かくて戦後日本の潜在的な安全保障に資する課題とは「教育」であった。日本を真の独立国家ならしめる根幹は教育である。ヤルタ・ポツダム体制下での精神的武装解除の効能

は結果として日本の抗戦意欲を減却させるに止まらず、「愚者の楽園」¹⁸という国民的道義頹廢を招いたのである。

このような背景にあって 1970 年 12 月 1 日に若泉は岩畔の志を引き継いで、第二代世界問題研究所長に就任した。京都産業大学世界問題研究所は草創期の大学の戦略上、長期間にわたって東京に置かれた（1980 年に京都市の神山キャンパスへ移転）。この頃の若泉は大学での授業科目は開講していなかったものの¹⁹、前述のように特別授業（講演会）に登壇していた。他方、若泉を慕って入学した吉村は師の期待に応えるように奮励していた姿が諸資料から浮かぶ。吉村は追分寮生長を経て、志学会（学生自治会）の副委員長になっていた。「志学会報」（第 11 号、昭和 47 年 1 月 12 日）、（第 15 号、昭和 47 年 11 月 30 月）には、執行委員長の木野正博と並んで吉村の檄文が紙面を席卷していた。

「私たちは今一度“建学の精神、を思いおこし、その理想実現に寄与しなければなりません。よって京都産業大学は日本における、もっとも神聖なる学問と教育との場となり、ユニークな、思い出深い学園生活の実現の旗が、神山の風にはためくことでありましょう」（第 15 号）と訴えており、往時の澆刺とした意気高らかな活気が鮮明に感じられる。

木野は「我々、京都産業大学人は、我々に好意を寄せる人々と悪意を懐く人々を問わず、全ての人々に対して、我々が、日本の歴史と伝統と文化を受け継ぎ、民族の団結と祖国の独立防衛の精神に徹し、豊かな国際的教養を身に付けて、日夜たゆまぬ努力を重ねている事を、高らかに宣言しようではありませんか」（同号）と青年の気概に溢れた修辞に草創期の清廉な学風生成を如実に感じざるをえない。

吉村は学生自治会の活動の一環でたびたび上京した。その際、世界問題研究所の若泉を訪ねては新聞記事のスクラップなどの仕事を手伝った。大学 4 年生の秋に上京した際、吉村は若泉の招きで千鳥ヶ淵のフェアモントホテルにおいて論壇の大御所で評論家の小林秀雄、作家の今日出海（京都産業大学教授、初代文化庁長官）との食事に同席した。会食の場所に拘ったのは、第二次世界大戦後の 1951 年に GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）の要請によって設立されたホテルであったことも若泉より吉村への隠されたメッセージであったと考えられる。すなわち日本は物理的・軍事的には米国に敗北したが、精神的・文化的には決して負けていないとする矜持の発露でもあった。無名の戦没者が眠る千鳥ヶ淵という場所で次代を担う若者への魂の交感でもあった。

そこで思いがけない会話ががあった。吉村にとって印象的な青春的一幕であることにほかならない²⁰。しかしながら若泉の人物像を考察するうえで、きわめて重要なエビデンスを含んでいるため、藤田 [2023] (p.35) に詳しいが、以下に引用する。

小林氏 吉村さん、戦後日本は経済発展した。いちばん失ったものは何だろう。

吉村氏 道徳心とか家族主義とか、日本古来の……小林先生、ヒントをいただけませんか。

小林氏 勇気だよ。勇気があってこそ知性は光り、行動できるんだ。

そして小林氏は、「若泉先生は若いが勇気のある人だ。あなたも一緒に学んで、京都産業大学を立派な大学にしてください」と語った。

筆者は小林のこの発言に若泉の人物像が収斂されているものとする。すなわち若泉は知性先行の人間ではない。まず「勇気」が前面に出ることにより、溢れる「知性」は、その「勇気」を支えるための道具に過ぎない。勇気による実践と行動を知性が支える独自の精神的なサイクルを構築していたのである。そのサイクルの発動で言語運用能力を駆使しての「親和力」や教育者としての「愛情」をも発動できる大胆かつ繊細な人物であったといえよう。

まさに小林は慧眼の士であり、〈戦後日本が失ったものは「勇気」〉という示唆は正鵠を射たものであった。くわえて往時の若泉が折りに触れては吉村に伝えていた言葉が現在においても重く響く。「賢明が蒙昧に敗北する」という若泉の肉声は戦後教育界に対する憂慮の念の表れであり、「愚者の楽園」が顕在化した戦後日本への警鐘にほかならない。

おわりに

本稿では、拙稿（Ⅰ）、（Ⅱ）に続いて教育者・若泉の思想形成および実践の事績を概観・考察した。この営為は単なる人物研究に止まらない。すなわち戦前から戦後へと消えそうな轍をふみ歩む教育史的意義をも含むものであった。いわば大学史の文脈を超えた今日的意義を帯びた課題でもある。また、若泉の思想形成に影響があったと考えられる人物として橋本左内、梅田雲浜、佐久間勉といった郷土出身者を挙げたが、そのいずれもが悲劇性を孕む凄まじい憂国の至情を貫いた「生きざま」を全うしている。若泉の原風景には、常に郷土の先人の清々しい群像があった。

そして原体験というべき 1945 年 7 月 19 日から 20 日にかけての「福井空襲」を機に国際政治への志を十五歳にして立てた。これが原初的な世界認識であり、国際政治学者への原点であった。若泉は初心を貫徹すべく欧米社会に眼を開きつつも、越前今立地方の伝統的な文化交流をとまなう出稼ぎの精神性を心に刻み、かつ左内のグローバルな視点を引き継ぎ、「日本文化の伝道師」として世界を舞台に躍動した。その源泉たるものは郷土福井の実学志向と教育哲学であった。活躍の場を世界に広げていた若泉は政界進出を意識していたものの、京都産業大学教授に就任したことで、研究者としてだけでなく教育者としての道を歩み出した。政界よりも学界・教育界の方に適性があったというよりも、「政治」以上に「教育」の方が日本を根底から変革できるとする広義における政治的影響力を意識した判断だったことが推察される。したがって政界進出を断念というよりも発展的な転換という方が妥当である。そしてもう一つの要因は京都産業大学での同志的結合体との創設間もない「大学づくり」にあった。実際のところ、若い学生との切磋琢磨は無限の可

能性を秘めていた。これこそ若泉の真骨頂だったはずである。

戦時下の思想的伏流水が敗戦後に地下水脈となり高度経済成長期の京都に湧出した奔流が京都産業大学の建学であった。それゆえ建学のダイナミズムの先端で生じた強い磁場は、かつての総力戦推進派、満洲人脈を引き寄せた。さらに「世界の碩学」をも呼び寄せた。その結果、知的営為は新日本の建設に向けての実現可能かつ高邁な理想を掲げることとなった。同大学が招聘した碩学のひとりであるトインビーが往復書簡（1968年6月12日、岩畔宛）での最後の修辞が象徴的である。「結論として私の述べたいことは、次のようなことであります。われわれはいまや、科学や物資技術よりも、精神的および社会的技術、哲学、および宗教を優先すべきである、ということなのです」と記しており、今日にも通じる人類の本質的なアジェンダ設定に繋がる提唱であると考ええる。トインビー、岩畔、若泉の三者が描く「世界連邦」の理想は、大戦後の国際連合では抑止力が低いと感じる多くの文化人、科学者、政治家などにより、その運動が全世界で繰り返し、続けられている。しかしながら、「自己中心性の克服」、「人間性の恢復」、「人間の精神的復活」を、なくして、その端緒にもおぼつかないであろう。これを導くことが教育の本義であり、使命であったことは若泉の事績に克明に刻まれている。

次稿（Ⅳ）では、沖縄返還交渉と知られざる素顔の若泉を吉村への聞き取り調査を基に包括的に考察する。繰り返しになるが、それは一般的に論じられる首相特使としての若泉ではなく、あくまで教育者・若泉の視座を読み解くことである。くわえて京都産業大学に内在する精神性について掘り下げて考察する。そして範型とする大学との比較検討を試みることで、根源と本質を浮き彫りにしていく。

参考文献

愛知大学ホームページ（<https://www.aichi-u.ac.jp/>）、2025年1月27日閲覧

アーノルド・J・トインビー、若泉敬 [1971]、『未来を生きる トインビーとの対話』、毎日新聞社

朝日新聞（2022年9月7日付、2023年1月20日付、若泉敬、吉村信二の記事）

藤田直央 [2023]、『徹底検証 沖縄密約 新文書から浮かぶ実像』、朝日新聞出版

福井県ホームページ（https://www.pref.fukui.lg.jp/doc/kyousei/keikakutop_d/fil/020323.pdf）、2025年1月25日閲覧

福井県教育委員会（編集・発行）[2017]、『ふるさと福井の先人100人』、福井県教育委員会

学校法人京都産業大学大学史編纂室[2001]、『学祖 荒木俊馬先生と京都産業大学ー建学の心をたずねて』、学校法人京都産業大学

学校法人京都産業大学大学史編纂室[2001]、『学祖 荒木俊馬先生と京都産業大学ー建学の心をたずねて』、WEB版（<https://www.kyoto-su.ac.jp/about/enkaku/kenkokoro.html>）、2024年12月3日閲覧

学校法人京都産業大学 [2004]、『京都産業大学 教学之源流』、学校法人京都産業大学大学史編纂室

学校法人京都産業大学 50年史編集委員会編 [2015]、『学校法人京都産業大学 50年のあゆみ』、学校法人

- 京都産業大学 (https://www.kyoto-su.ac.jp/about/ahcetq0000000sdb-att/2016_50th.pdf)、2024 年 12 月 3 日閲覧
- 学校法人京都産業大学 50 年史編集委員会 [2023]、『学校法人京都産業大学 50 年の歴史 (一) 前史 編—京都産業大学の誕生—』、学校法人京都産業大学
(https://www.kyoto-su.ac.jp/about/enkaku/omg8840000001ls1-att/50th_history01.pdf)、2024 年 12 月 3 日閲覧
- 後藤乾一 [2010]、『「沖縄核密約」を背負って 若泉敬の生涯』、岩波書店
- 橋本恵 [1999]、『謀略』、早稲田出版
- 石原莞爾 [2019]、『世界最終戦争論 [新書版]』、毎日ワンス
- 岩畔豪雄 [1967]、『戦争史論』、恒星社厚生閣
- 岩畔豪雄 [1970]、『科学時代から人間の時代へ』、理想社
- 岩畔豪雄 [2015]、『昭和陸軍謀略秘史』、日本経済新聞出版社 (「岩畔豪雄氏談話速記録」(日本近代史料研究会、1977 年刊、非売品)の改題)
- 岩畔伸夫 [1970]、『追想起』、私家版
- 岩武光宏 [2020]、『戦前・戦後を貫く知的欲求に関する一考察—A I 時代と岩畔豪雄の省察—』、『東京交通短期大学研究紀要』、第 25 号、東京交通学会、pp.71-86
- 岩武光宏 [2021]、『教育思想の淵源と「建学の精神」に関する一考察：大分県出身の大学創設者を事例として』、『総合文化学論輯』、第 15 巻、総合文化学研究所、pp.25-41
- 岩武光宏 [2023a]、『京都における学都形成過程—磁場の形成とその系譜—』、『東京交通短期大学研究紀要』、第 28 号、東京交通学会、pp.154-168
- 岩武光宏 [2023b]、『第 24 回総合文化学会 (リモート) シンポジウム (口頭発表)『教育思想の淵源と「建学の精神」を論じる今日的意義—フィールドワークの重要性について—』、『総合文化学論輯』、第 18 巻、総合文化学研究所、pp.56-80
- 岩武光宏 [2023c]、『第 25 回総合文化学会 (リモート) シンポジウム (口頭発表) 教育思想の淵源と「建学の精神」を論じる今日的意義—フィールドワークの実践 (校歌の原風景を訪ねて)—』、『総合文化学論輯』、第 19 巻、総合文化学研究所、pp.71-96
- 岩武光宏 [2023d]、『京都産業大学と若泉敬の時代(I)：科学技術と道義的精神』、『総合文化学論輯』、第 19 巻、総合文化学研究所、pp.1-19
- 岩武光宏 [2024]、『京都産業大学と若泉敬の時代(II)：理想の大学を求めて』、『総合文化学論輯』、第 20 巻、総合文化学研究所、pp.17-36
- 開学四周年記念実行委員会 [1969]、『サギタリウス』、京都産業大学
- 河田宏 [2002]、『満洲建国大学物語』、原書房
- 河原仁志 [2022]、『沖縄 50 年の憂鬱 新検証・対米返還交渉』、光文社
- 川合全弘 [2017a]、『一軍人の戦後—岩畔豪雄と京都産業大学—(上)』、『産大法学 50 巻 1・2 号』、pp.221-239

- 川合全弘 [2017b]、「一軍人の戦後 一岩畔豪雄と京都産業大学—（中）」、『産大法学 51 巻 1 号』、pp.27-43
- 川合全弘 [2018]、「京都産業大学世界問題研究所五十年外史 1966～2016」、『京都産業大学世界問題研究所紀要』、第 33 巻、pp.1-51
- 川合全弘 [2019]、「一軍人の戦後 一岩畔豪雄と京都産業大学—（下）」、『産大法学 53 巻 2 号』、pp.1-74
- 川合全弘 [2021]、「科学技術の発展と人類社会の変化—就任の挨拶に代えて（1）—」、『京都産業大学世界問題研究所紀要』、第 36 巻、pp.175-176
- 川合全弘 [2023]、「プロジェクトを振り返って」、『京都産業大学世界問題研究所紀要』、第 38 巻、pp.121-131
- 川合全弘 [2024]、『京都産業大学世界問題研究所関連資料 京都産業大学史論集』、京都産業大学世界問題研究所
- 小林英夫 [2005]、『満州と自民党』、新潮新書
- 額綱厚 [2018]、『〔増補版〕総力戦体制研究 日本陸軍の国家総動員構想』、社会評論社
- 桑原亮人 [2006]、「“志、に生きた建国大学」、『同文書院記念報 vol.14』、愛知大学東亜同文密院大学記念センター、pp.18-28
- 京都産業大学同窓会事務局 [2022]、『むすび』京都産業大学同窓会報第 58 号
- 京都産業大学ホームページ (<https://www.kyoto-su.ac.jp>)、2025 年 1 月 7 日閲覧
- 京都産業大学広報課 [1976]、『京都産業大学報』(1976 年 10 月 25 日)、通第 61 号、京都産業大学毎日新聞 (2015 年 12 月 22 日付、岩畔豪雄の記事)
- 三上一夫、伴五十嗣郎、笠島清治、坂井敬市、山田敏文 [1990]、『少年、君たちはどう生きるか 橋本左内先生の「啓発録」に学ぶ』、青少年育成福井県民会議
- 三浦英之 [2015]、『五色の虹 満州建国大学卒業生たちの戦後』、集英社
- 宮脇淳子 [2019]、『満洲国から見た近現代史の真実』、徳間書店
- 宮沢恵理子 [1997]、『建国大学と民族協和』、風間書房
- 宮沢恵理子 [2006]、「講演記録 満洲にあった建国大学」、『同文書院記念報 vol.14』、愛知大学東亜同文密院大学記念センター、pp.4-17
- 溝部英章 [2017]、「本学建学の精神と法学部の使命（1）」、『産大法学 50 巻 1・2 号』、京都産業大学法学会 編、pp.257-280
- 溝部英章 [2015]、「京都産業大学建学の理念——その三つの源泉：荒木俊馬、作田壮一、若泉敬」、『発表概要』、(https://www.kyoto-su.ac.jp/project/kikou/sekaimondai/kenkyu/20151028_kenkyu.html)、2024 年 12 月 7 日閲覧
- 根津朝彦 [2008]、「編集者粕谷一希と『中央公論』—「現実主義」論調の潮流をめぐって—」、『総研大文化科学研究』、第 4 号、pp. 57-81
- 日本の民主主義を育てる会 [1969]、『民主主義』、第 1 号（昭和 44 年 8 月 25 日発行）
- 日本の民主主義を育てる会 [1986]、『民主主義』、第 100 号（昭和 61 年 9 月 25 日発行）
- 日本私立大学連盟調査企画委員会第一分科会（編）矢沢西二、沢田進編集 [1985]、『建学の精神』、日本私

立大学連盟

佐久間艇長伝記編集委員会、小堀友廣、河村平右衛門、百田吉江、山口容子、山本和男、吉田久吉 [2012]、

『一 沈勇の人 佐久間 勉 ― 十二時四十分ナリ』、佐久間艇長遺徳顕彰会

三縁の会ホームページ (<http://www.san-en.org>)、2025 年 1 月 21 日閲覧

産経新聞 (2022 年 5 月 25 日付、若泉敬、吉村信二の記事)

澤井啓一 [2014]、『山崎闇斎：天人唯一の妙、神明不思議の道』、ミネルヴァ書房

信夫隆司 [2012]、『若泉敬と日米密約 沖縄返還と繊維交渉をめぐる密使外交』、日本評論社

寺崎昌男 [2020]、『日本近代大学史』、一般財団法人 東京大学出版会

坪内隆彦 [2016]、『GHQ が恐れた崎門学：明治維新を導いた國體思想とは何か』

土屋英一編 [1972]、『軍参謀長岩畔豪雄』、岩畔参謀長追悼録編纂委員会

角鹿尚計 [2023]、『橋本左内一人間自ら適用の士有り』、ミネルヴァ書房

若泉敬 [1994]、『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』、文藝春秋

矢部貞治 [1974]、『矢部日記 蹲踞の巻』、読売新聞社

役員四季報編集部 [2024]、『役員四季報 2025 年版』、東洋経済新報社

山本武則 [2017]、『陸軍中野学校「秘密工作員」養成機関の実像』、筑摩書房

読売新聞 (2022 年 5 月 1 日付、若泉敬、吉村信二の記事)

吉村信二 [2017]、『若泉敬先生に学ぶ』、私家版

写真 1 吉村信二 (1984 年 5 月 23 日) 撮影

写真 2 学校法人京都産業大学 [2004] より写真引用

¹ 京都産業大学ホームページの「沿革」によれば、初期の三年間だけ見ても驚異的な発展であったことが窺える。1965 (昭和 40) 年、経済学部・理学部の設置。1966 (昭和 41) 年、追分寮完成、世界問題研究所設置。1967 (昭和 42) 年、経営学部・法学部・外国語学部設置。2025 (令和 7) 年では、文系・理系 10 学部 10 研究科をそろえ、約 15,000 人の学生を擁するに至っており、卒業生数は、約 16 万人に上っている。

² 建国大学は特異な大学であり、「五族協和」を謳い学内では民族協和の試行錯誤がありながらも言論の自由が保障されており、当時、日本国内で読むことが困難であった共産主義に関する発禁本も閲覧可能であった。三浦 [2015] の丹念な建大卒業生への取材は、激動の近代史に翻弄された特殊な大学像とそこで行われた先進的な試みが未完に終わったことを浮き彫りにしている。

³ 2005 年 11 月 19 日、愛知大学豊橋校舎本館会議室において開催。

⁴ 前掲 [2015]、宮沢 [1997]、[2006] を参照。

⁵ 愛知大学ホームページによれば、「愛知大学は、1946 年愛知県豊橋市に誕生しました。その前身ともいえる東亜同文書院(後に大学)は、1901 年中国上海に設置され、日本の海外高等教育機関として最も古い歴史をもちます。当時貴族院議長であった近衛篤磨公が、東亜同文会を設立。東亜同文会の理念は教育文化事業によって日中友好提携を成し遂げることにより、そのための人材育成が東亜同文書院大学の設立目的でした。後に首相となった近衛文麿公も 1926 年から 5 年あまり院長に就任しています。アジア随一の国際都市であり、当時の文化や流行の発信地でもあった上海で、学問の自由を尊ぶ校風のもと、中国・アジア重視の国際人を養成。しかし、日本の敗戦によって東亜同文書院大学は中国に接収、半世紀にわたる歴史の幕を閉じたのです。その折、同大学最後の学長を務めた本間喜一(後に最高裁判所事務総長)は、新たな大学の設立を決意。1946 年 5 月、本間学長の呼びかけに東亜同文書院大学等の教職員、学生の多くが集い、同年 11 月 15 日に愛知大学は中部地区唯一の旧制の法文系大学として誕生しました。1949 年 4 月からは法経学部(法学科・経済学科)に文学部(社会学科)を加えた 2 学部 3 学科で新制大学へと移行、今日の発展に至ったのです」と説明しており、愛知大学が東亜同文書院大学の後身校であることをあきらかにしている。

-
- ⁶ 江頭恒治、1900 年生まれ。京都帝大卒、経済学士、経済史・農村経済、作田学に心酔。戦後は京都産業大学・滋賀大学教授。石田興平、1905 年生まれ。京都帝大卒、経済学士、立命館大学専門部教授、1939 年に建大赴任。戦後は滋賀大学・京都産業大学教授。西元宗助、1909 年生まれ。京都帝大卒、文学士、教育学、福島政雄の弟子。作田荘一から建大で仏教を研究してほしいと要請された。シベリアで抑留を経験。戦後は京都産業大学教授。黒松巖、1905 年生まれ。京都帝大卒、経済学士、鉄工論・経済概論、京都帝大経済学部副手、作田荘一の門下生。外務省委託中華民国留学生補導。1938 年に建大赴任。戦後は同志社大学・京都産業大学教授。以上は、宮沢 [1997] の「日本人建国大学教職員一覧」(pp.292-305) を参照。
- ⁷ 川合 [2022]、[2023] によれば、初期における京都産業大学での教育改革案「中間答申書」とは、教養教育が形骸化された新制大学への批判的な議論から学部制を廃止しコース制を提唱するという先駆的な内容であったことが窺える。実現はしなかったものの、議論そのものに内在した同大学の大胆な先進性は注目に値する。
- ⁸ 岩武 [2025] 「教育者・若泉敬外伝—教育思想伝承のかたち—」、『知の悦び—総合文化学の確立へ—』、中川書店を参照されたい。
- ⁹ 産経新聞 (2016 年 11 月 16 日付、<https://www.sankei.com/article/20161116-IRNHMJHW25LYXCFTTJ6SSD4UJ4/>) を参照。
- ¹⁰ 福井県ホームページ別添資料「福井県教育振興基本計画 (令和 2～6 年度)」[福井県教育委員会、令和 2 年 3 月]、pp.49-53 を参照。
- ¹¹ 同書には、本稿で触れた吉田東篁、横井小楠、梅田雲浜、橋本左内、佐久間勉、若泉敬はじめ福井の先人 100 人の事績が教材として活用できるように明解に収録されている。
- ¹² 角鹿 [2023] 「はしがき」に、「彼の知識と識見は実にグローバルで、洋書に通じ当時最も国際感覚の豊富な青年であった。(中略) また、日本国中を一家と見て世界の中の日本の近未来図を描き、その上で今日の国際連合に相当する国際的同盟機関の成立を予言したのは、当時として並大抵の識者ではない」と述べているように、今日なお思想的影響を与え続ける人物像と構想力が窺える。
- ¹³ 粕谷一希より吉村信二宛の書簡 (2002 年 4 月 17 日) を参照。
- ¹⁴ 吉村への聞き取り調査 (2025 年 1 月 15 日) によれば、熊谷は無私にして剛腹な郷土愛に溢れた人物であったという。ちなみに熊谷は吉村夫妻の媒酌人を務めた。
- ¹⁵ 役員四季報編集部 [2024] を参照。
- ¹⁶ 当時の紛争、騒乱事件等での逮捕者数は報道各社の発表資料によって諸説あるものの、本稿では日本の民主主義を育てる会 [1986]、第 100 号でのコラム「並木」を参照。
- ¹⁷ アーノルド・J・トインビーは英国ロンドン出身 (1889 年生まれ、1975 年逝去)。オックスフォード大学卒業。古代史専攻。第一次大戦前、母校ペーリオル・カレッジ教師、一時外務省情報部勤務。戦後、ロンドン大学教授、王立国際問題研究所研究部長、外務省調査部長などを歴任。
- ¹⁸ 若泉 [1994] は、戦後日本の姿を「愚者の楽園」と表現した。それは「戦後復興」の名の下にひたすら物質金銭万能主義に走り、精神的、道義的、文化的に「根無し草、へと墮落した戦後社会への警鐘の修辭でもあった。
- ¹⁹ 川合 [2018] の註釈 (84) および吉村への聞き取り調査によれば、若泉の担当授業は「世界と日本」、「英語」であった。親交があった駐日英国大使ヒュー・コートツィの著書を英語のテキストに使うなど自らの人的ネットワークを惜しげもなく大学教育に反映させ、学生に伝授した。
- ²⁰ 前掲の聞き取り調査によれば、若泉が次代を担う若者に対して特段の愛情と情熱を注ぎ、自らの人脈とも引き合わせるほどの包容性に溢れた人物であったことが窺える。

[Kyoto Sangyo University and the era of Kei Wakaizumi (III) — Postwar Japan and the Restoration of Humanity —]

[IWATAKE, Mitsuhiro・拓殖大学専任職員]

[現在の研究テーマ：地域における教育思想の淵源に関する研究]